

フランス語における《double modals》

《Double modals》 in French

甲斐 基文

KAI Motofumi

東京家政大学

Université Tokyo Kasei

E-mail: kai-mo@tokyo-kasei.ac.jp

ふらんぼー(Flambeau) vol.46 2020, p.19-40.

原稿受理 2020-11-21 ; 最終版 2021-01-23

抄録

フランス語のモダリティ動詞である *devoir* と *pouvoir* が連続共起する構造, いわゆる “double modals” について考察した。統辞的には8パターンの生起が理論上可能であるが, 実際にはそのうちの3パターンのみが可能であることを実証的に明らかにした。認識的用法, 拘束的用法というモダリティの観点から現象の説明を試みた結果, 現存の枠組みの中に不十分な点があることを指摘するに至った。

Summary (Résumé)

We are concerned in this paper with what we call French “double modals” composed of *devoir* and *pouvoir*. We found from our observation that, whatever the order of these two verbs, the combination of modal interpretations <epistemic>+<deontic> is possible and, when *devoir* precedes *pouvoir*, the combination <deontic>+<deontic> is also possible. Our study also revealed the insufficiency of existing theories for an adequate explanation of the latter linguistic fact.

キーワード : モダリティ, 二重助動詞

© ふらんぼー Flambeau 46 (2020) pp.19–40.

183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1 東京外国語大学フランス語研究室

183-8534 French Section, Tokyo University of Foreign Studies, 3-11-1

Asahi-cho Fuchu City, Tokyo

本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC-BY) 下に提供します。

<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>



1. 序論

フランス語の *devoir* と *pouvoir* はモダリティ(modalité)を表す動詞であり¹, 認識的モダリティ(modalité épistémique), 並びに拘束的モダリティ(modalité déontique)を表しうる。フランスにおけるモダリティ動詞の先駆的研究とも言える Sueur(1977, 1979, 1983)では, *devoir* と *pouvoir* の表す意味が次のように分類されている。

- | | |
|--|----------------|
| (1) POUVOIR : I a- Permission, b- Capacité, c- Possibilité | II Eventualité |
| DEVOIR : I a- Obligation, b- Nécessité | II Probabilité |

Iは拘束的意味², IIは認識的意味である。簡潔に言うならば, 認識的モダリティを表す用法(以下, 認識的用法)では, 発話された命題内容, 立言内容の真実性に対する話者の確信の程度, すなわち命題内容の生起に関わる蓋然性, 可能性という話者の判断を *devoir* と *pouvoir* が各々表す。したがって, 話者志向的なモダリティと言える。それに対して, 拘束的モダリティを表す用法では(以下, 拘束的用法), *devoir* は主語に課される義務, 必要を意味し, *pouvoir* は主語に関する許可, 能力, 可能を表す。このように行為者と叙述の関係を規定するという意味から考えると, 行為者志向的とも言えるだろう³。

(2) Il **doit** y avoir un gros accident plus loin.(Haruki Murakami, *IQ84*, Livre 1, Belfond, 2011, p.17)「前の方でどうやらでかい事故があったようです」⁴

(3) Je **dois** me concentrer sur la descente de cet escalier, se dit-elle.(H.M., 1, p.60)「階

¹ *devoir* と *pouvoir* は助動詞と分類されることがある。これは後ろに不定詞を従えること, 命令法が欠如していることなど様々な理由があるが, 本稿ではその議論には入らず単に動詞と呼ぶこととする。この分類に関しては, *pouvoir* が助動詞であるか動詞であるかを論じた川島(2012)を参照。

² SUEUR 自身は radicale(根源的)という用語を用いている。

³ 黒滝(2005), p.12.

⁴ 本稿で, FRANTEXT, インターネットのウェブサイト, Haruki MURAKAMI(2011).*IQ84*, Livre1~Livre3 で収集した例文を引用している。ウェブサイトから取得した全ての例の最終確認日は2020/11/10である。本文中の記述の煩雑さを避けるために, ウェブサイトから取得した例文の場合は, その出典である URL を脚注に示す。引用例文が長い場合があるのは, モダリティ動詞が認識的に, 或いは拘束的に用いられているのかを判断するために, ある程度の長さの文脈が必要であるという理由による。それ以外の FRANTEXT と MURAKAMI からの引用の場合は, 慣例に従い()内に出典を示す。村上春樹(2009, 2011)のフランス語訳である Haruki MURAKAMI(2011).*IQ84*, Livre1~Livre3.の採用理由は, 実際の言語運用において, *devoir* と *pouvoir* が認識的モダリティと拘束的モダリティのいずれを表しているか曖昧で微妙なケースが多く出現するが, 翻訳を原本と照らし合わせることによって, その曖昧さを排除できる可能性が少しでも高いと考えたためである。実際, 非常に多くの *devoir* と *pouvoir* の生起, および double modals の生起が見られ, コーパスとしての役割を十分に果たしてくれているものと考えられる。同書からの例文引用の場合は, 記述の煩雑さを回避するため, 例えば Livre 1 の場合は, これ以降 H.M.,1 と表記し, Livre 2, Livre 3 もそれに準拠して H.M.,2, H.M.,3 と表記する。ここからの引用の場合には, 基本的にオリジナル作品の当該部分の原文を付記している。文脈から切り離された結果, 単独では文意がとりにくい訳になっていたり, かなり「意識」されていたりする場合も散見されるので, あくまでも *devoir* と *pouvoir* の用法を判断する際の参考とするために付記している。よって, 日本語版のページ数などの詳細は省略する。

段を下りることに意識を集中しなくては。」

(4) Mais cette fois, ensuite, vous **devez** disparaître.(H.M.,2,p.21)『ただし今回、あなたはそのあと姿をけさなくてはなりません。』

(5) On ne sait pas ce qui **peut** arriver.(H.M.,2,p.144)「いつ何がおこるかわかったものじゃありません。」

(6) Ça va, tu **peux** rester, répondit Tengo, avec résignation.(H.M.,2,p.227)『ここにいてかまわない』と天吾はあきらめて言った。」

(7) On ne **peut** pas choisir ses sentiments, observa Aomamé.(H.M.,1,p.339)『そういう気持ちっていうのは選びようがないことなのよ』と青豆は言った。」

(2)における **devoir** は「～に違いない」という蓋然性(probabilité)を意味するので認識的用法である。それに対して(3)における **devoir** は「～しなくてはならない」という主語に課せられた必要(nécessité)を、(4)では主語に課せられた義務(obligation)が表されているので、両者とも拘束的用法で用いられている。一方 **pouvoir** の方は、(5)では「～かもしれない」という可能性(éventualité)⁵を意味しているので、認識的用法で用いられており、(6)では文主語に与えられる許可(permission)を意味し、(7)では「～できる」という文主語の持つ能力(capacité)を表しているので、両者は拘束的用法になる。

さて、英語においてこの**devoir**と**pouvoir**に相当する**can**, **may**, **must**などは、法助動詞(modal auxiliary)という統辞・意味的範疇に分類され、そこに分類される語は、統辞的にも意味的にも様々な共通点を有している。その統辞的特徴の一つとして、これらの法助動詞は、通例連続共起しない、すなわち***can must**, ***should can**などの連辞が認められないという特徴がある。

(8) *He may must work today.

(9) He may have to work today.

(10)*He must can speak French to work here.

(11) He must be able to speak French to work here.

(8)のように**may**と**must**は共起できないので非文となる。文法的な文にするには、(9)に示したように、**may**に後続する**must**を同様の意味を表す**have to**に変えなければならない。同様に、(10)も**must**と**can**が共起できないので非文であり、こちらも(11)のように**must**に後続する**can**の方を**be able to**と変えることによって文法的な文となる。

このように、現代の標準的英語においては法助動詞が連続共起しないのが原則であるので、2つの助動詞が連続共起するという二重助動詞(double modals)⁶という現象が観察されるのは、あくまでも例外的と言える⁷。それに対して、フランス語の**devoir**と**pouvoir**は、

⁵ 訳語は拘束的用法の可能(possibilité)と区別するために「偶発性」の方が良いかもしれないが、物事が生じる「可能性」という意味で用いている。

⁶ 三ツ石(2017): 298.

⁷ 現代においてもいくつかの英語の変種においては観察されており、BUTTERS (1973),

その統辞的特徴からすると動詞的側面が強く、英語の法助動詞に見られるような厳しい統辞的制限なくdevoirとpouvoirが連続生起することは可能である。このように、この二つの動詞が連続生起する場合に、この構造体を英語のそれにならってdouble modalsと呼ぶこととし、本稿ではこの構造の特徴について検討することとする。

2. Double modals

2. 1. Devoir と pouvoir の連続共起

前章で見たように、devoirもpouvoirも認識的用法と拘束的用法の両方をもつので、この二つの動詞が連続共起してdouble modalsという構造を持つ場合、意味用法的に可能な組合せは、単純に考えると、＜仮説1＞に示す8つとなる。

＜仮説1＞double modalsにおいて、devoirとpouvoirの表すモダリティ用法の単純な可能な組合せは、以下の8パターンである。

- A. pouvoir <認識的用法> + devoir <認識的用法>
- B. devoir <認識的用法> + pouvoir <認識的用法>
- C. pouvoir <認識的用法> + devoir <拘束的用法>
- D. devoir <認識的用法> + pouvoir <拘束的用法>
- E. pouvoir <拘束的用法> + devoir <認識的用法>
- F. devoir <拘束的用法> + pouvoir <認識的用法>
- G. pouvoir <拘束的用法> + devoir <拘束的用法>
- H. devoir <拘束的用法> + pouvoir <拘束的用法>

では、この仮説の検証に移る。まず、AとBは論理的不可能な組合せと考えられる。

(12)***Certainement** il viendra **sans doute** demain.

(13)***Peut-être** elle est **probablement** fatiguée.

(14) Il me semble que vous ne trouvez pas ce que vous cherchez. **Peut-être** que nous **pouvons** vous aider⁸.

(15) Puisque vous parlez notre langue, mademoiselle, nous **pouvons peut-être** nous arranger.(LEVY Marc, *L'étrange voyage de Monsieur Daldry*,2011,p.160)

(16) Nous allons **peut-être pouvoir** aménager une situation dans laquelle le leader et vous même serez seuls tous les deux, dit la vieille femme. (H.M.,2,p.21)「リーダーとあなたが二

PAMPELL(1975), DI PAOLO, MCCLLENON & RANSON(1979), DI PAOLO(1989), NAGLE(1991), BATTISTELLA(1995), HASTY(2012), WILLIAMSON(2018)など、数多くの研究がある。また HORVAT(2018), PETERS & BEMBRIDGE(2016), THRÁINSSON & VINKER(1995)など、英語以外の言語を対象にした研究も見られる。

⁸ <http://luxemburg-aubervilliers.webcollege.fr/category/vie-etablissement/unss/>

人きりになる状況を設定することは可能です」と老婦人は言った。

(12)～(13)は、文中に認識的モダリティマーカの機能をもつ認識的モダリティを表す副詞(以下認識的モダリティ副詞)を意図的に共起させた非文の例であり、(14)～(16)はそれらが実際に共起している例である。Certainement, sans doute, peut-être は認識的モダリティ副詞であり、それぞれが表す命題の真実性に対して話者が抱く確信の程度は異なっている。(12)では発話内容の真実性に対して非常に高い確信の程度を表し「きっと、間違いなく」を意味する certainement と、それと同じほどは高くない確信の程度を表し「多分、恐らく」を意味する sans doute が、(13)では発話内容の真実性に対して非常に低い話者の確信の程度を表し「ひょっとすると」の意味を表す peut-être と、ある程度高い程度を表し「たぶん、おそらく」を意味する probablement という、異なった確信の程度を表す副詞が共起してしまっているために、両文とも非文になる。二つの異なった確信の程度を表す認識的モダリティ副詞は共起しない。なぜならば、一つの命題内容の真実性について、異なった程度の確信を同時に話者が表すことは論理的にあり得ないからである。これによって明らかなことは、異なった確信の程度を表す二つの認識的モダリティマーカは共起しないということの意味する。よって、もし共起した2つのモダリティ動詞が両方とも認識的用法で用いられるということは、異なった確信の程度を表す認識的モダリティ表現が共起することになるので、その文は非文となる。以上のことから、double modals を形成する devoir と pouvoir が両方とも認識的用法である可能性は排除できる。

(12)と(13)が非文であるのに対して、(14)～(16)では、pouvoir と peut-être という2つのモダリティマーカが共起していながら非文ではない。(14)～(15)で pouvoir は「～できる」という意味の拘束的用法であり、peut-être の方は「～かも知れない」という認識的モダリティを表しているので、異なった類のモダリティを表していることになる。(16)では不定法に置かれた pouvoir が同様に拘束的モダリティマーカの働きをしているので、問題は生じない。すなわち、認識的モダリティマーカと拘束的モダリティマーカは共起する⁹。

以上のことから、＜仮説1＞で示した8つのパターンの中からAとBを排除したC～Hの6つのパターンが生起する可能性がある。そこで、＜仮説1＞を修正して＜仮説2＞を設定する。

＜仮説2＞Double modals が生起した場合のモダリティ用法の組合せは、以下の6パターンである。

- C. pouvoir <認識的用法> + devoir <拘束的用法>
- D. devoir <認識的用法> + pouvoir <拘束的用法>
- E. pouvoir <拘束的用法> + devoir <認識的用法>
- F. devoir <拘束的用法> + pouvoir <認識的用法>
- G. pouvoir <拘束的用法> + devoir <拘束的用法>

⁹ KAI(2000): 149-150 参照。ただし、後述するように、過剰なモダリティ付与の場合は例外となる。

H. **devoir** <拘束的用法> + **pouvoir** <拘束的用法>

2. 2. double modals の実例分析

本節では<仮説2>を検証するため、double modals の実例の検討を行う。

(17) Le détective **doit** être débrouillard et patient, car il **peut devoir** travailler pendant des mois pour trouver juste un indice dans l'affaire qu'il étudie¹⁰.

(18) Le récit **peut devoir** s'interrompre momentanément pour une tout autre raison, peut-être plus fondamentale encore, sur le chemin forestier de la prose.(ROUBAUD Jacques, *Le Grand Incendie de Londres : récit, avec incises et bifurcations*,1989, p.34)

(19) Je vis avec elle, j'ai ajouté. Je **dois pouvoir** vous donner les renseignements que vous voulez...(DJIAN Philippe, *37°2 le matin*,1985,p.329)

(20) Dans ce cas, ce problème **devrait pouvoir** être facilement dissimulé.(H.M.,1,p.215)
「それならなんとかうまく隠すことができるかもしれません」¹¹

(21) Et si vraiment, pensait-elle, c'est en même temps le récit de Tengo et le mien, je **devrais alors pouvoir** écrire ma partie.(H.M.,3,p.424) 「そしてもしそれが天吾の物語であると同時に、私の物語でもあるのなら、私にもその筋を書くことはできるはずだ」

(22) Certainement, nous **devons pouvoir** adapter nos services en fonction des besoins de nos passagers¹².

(17)は *détective*¹³の定義を示すウェブサイトから取得したものであるが、car 以降の *il peut devoir* の部分が double modals になっている。car 以降の部分が前文の内容に対する補足的理屈説明となっていることから、文意は「刑事は抜け目なく、忍耐強くなくてはならない。というのも、自分が探求している案件で、たった一つの手がかりを見出すために、何カ月も働かなくてはならないかもしれないからである」ということになる。すなわち、直説法現在時制に置かれている *pouvoir* は偶発性・可能性を表す認識的用法であり、不定法に置かれている *devoir* は必要を表す拘束的用法である。したがって、(17)は<仮説2>のCにあたる例となる。(18)は、「レシ(物語)は、全く別の理由で一時的に中断しなければならないかもしれない」と解釈でき、*pouvoir* が認識的用法で、*devoir* の方は拘束的方法になるので、同様にCにあたる例と考えられる。(19)は、「あなたの望みの情報を提供できるように」と解釈でき、*devoir* の方が認識的用法、*pouvoir* の方が拘束的用法と考えられるので、これはDの例となる。(20)と(21)では、条件法現在に置かれた *devoir* は認識的用法で蓋然性を表し、後続する不定詞の *pouvoir* は可能を表す拘束的用法となり、これらもDの例

¹⁰ <https://educalingo.com/fr/dic-tr/dedektif>

¹¹ この条件法については3.2.で後述。

¹² <https://www.travel-iles.com/le-mag/un-fast-track-cip-access-verra-le-jour-cette-annee-questions-a-roshan-seetohul-chairman-dairports-of-mauritius-co-ltd-aml/>

¹³ ここでは前後の文脈から「刑事」の意味で用いられていると判断できる。

となる¹⁴。(22)は、ウェブサイト上の、空港のサービス担当への責任者のインタビュー記事から取得した例であるが、*devoir* は文主語に課せられた義務を表し、後続する不定法 *pouvoir* も能力を意味するので、両方とも拘束的用法となり H の例となる。

以上の例より、C,D,H のパターンが存在することが実証されたが、我々のコーパス内では、上記の E,F,G の実証例は見出すことができなかった¹⁵。そこで＜仮説2＞を修正して＜仮説3＞を設定する。

＜仮説3＞Double modals が生起した場合のモダリティの意味の組合せは、以下の3パターンである。

- C. *pouvoir* <認識的モダリティ> + *devoir* <拘束的モダリティ>
- D. *devoir* <認識的モダリティ> + *pouvoir* <拘束的モダリティ>
- H. *devoir* <拘束的モダリティ> + *pouvoir* <拘束的モダリティ>

3. モダリティの出現パターン

3. 1. 認識的用法＋拘束的用法

まずは、＜仮説3＞の C と D について検証するために、以下のように仮説を定める。

＜仮説4＞第一位置にあるモダリティ動詞が認識的用法である場合には、後続するモダリティ動詞は必ず拘束的用法になる。

Bally(1965)は、モダリティが明示的である発話は、モダリティを実現している部分である *modus* と、その対象である *dictum* からなるとする¹⁶。例えば、上記の C,D の組合せにおいて、認識的用法におかれた *devoir* や *pouvoir* は *modus* に相当する。認識的用法で用いられているこの *devoir* と *pouvoir* が *modus* の働きを持っているならば、残りの発話要素は *dictum* となる。既に *modus* に認識的モダリティマーカが生起し、話者の心的態度が表明されているということは、別の認識的モダリティマーカが *dictum* 内に追従生起することはないので、これらの表現と共起する場合のモダリティ動詞は拘束的用法であることが予想される。以上のことを実証するために、認識的モダリティ表現とモダリティ動詞の共起の問題を見ておこう。*Peut-être, il se peut, il est possible* は *pouvoir* の認識的用法と同程度の低い確信の程度を表す認識的モダリティ表現である。また、*probablement, il est*

¹⁴ 3.2.で後述するように、この条件法は過剰なモダリティ付与(*surmodalisation*)である。条件法におかれた *devoir* は、直説法で用いられている場合に比べて蓋然性が少し下がる。直説法の *devoir* が英語の *must* に相当するならば、条件法現在の *devoir* は *should* に相当する程度であると言えよう。

¹⁵ この理由については、3.3.で詳しく述べることにする。

¹⁶ CH.BALLY(1965) : 36. “La phrase explicite comprend donc deux parties: l’une est le corrélatif du procès qui constitue la représentation [...]; nous l’appellerons, à l’exemple des logiciens, le *dictum*. L’autre contient la pièce maîtresse de la phrase, celle sans laquelle il n’y a pas de phrase, à savoir l’expression de la modalité, corrélatie à l’opération du sujet pensant.”

probable, および certainement, il est certain は devoir の認識的用法と同程度のやや高い確信の程度を表す認識的モダリティ表現である。これらのグループと pouvoir や devoir が共起する場合には、認識的モダリティ表現が命題内容の真実性に関わる話者の確信の程度を既に表しているのであるから、必然的に pouvoir も devoir も拘束的用法になるはずである。

(23) Il me semble que vous ne trouvez pas ce que vous cherchez. **Peut-être que nous pouvons vous aider**¹⁷.

(24) Si tu étudies sérieusement, tu **pourras peut-être** devenir professionnel, lui dit-il. (H.M.,1,p.318)「このまま専門的に勉強すればプロになれるかもしれない、と教師は言った」

(25) **Peut-être devrait-il** sortir à l’instant et lui emboîter le pas. (H.M.,3,p.335)「すぐに出て行って、彼女のあとをつけるべきなのだろう」

(23),(24)はモダリティ副詞 peut-être(que)と pouvoir の共起例である。(23)はある学校のウェブサイトで検索をした際に、ヒットするものがなかった時に表示される文面である。前文の意味から「ひょっとしたらお手伝いできるかもしれません」という意味に解釈でき、pouvoir は拘束的用法である。(24)の pouvoir も同様に拘束的用法である。(25)では、条件法におかれた devoir の方が peut-être と共起しており、拘束的用法に用いられている例である。

(26) **Peut-être le pourrais-je** un jour, en effet, mais **il se peut aussi que je ne puisse jamais le faire**.(H.M.,1,p.242)「いつかお話しできるかもしれません。できないままに終わるかもしれません」

(27) Selon ton résultat, **il se peut que tu doives** suivre un cours d’anglais (ENGL 1550 E-01) ainsi que des tutorats réguliers¹⁸.

(26)の最初の条件法に置かれた pouvoir は(23), (24)同様 peut-être と共起した拘束的用法であり、2つ目の接続法に置かれた pouvoir は、認識的モダリティ表現 Il se peut que の que によって導かれた節の中で拘束的用法に用いられている。(27)はカナダの Université Laurentienne のウェブサイトから取得した、看護学部に入學した際に十分な英語力がない場合の科目履修に関する説明した文である。「あなたの結果によって、定期的な個別指導とともに、英語の授業を受けなくてはならない可能性がある」という意味内容から、認識的モダリティ表現 il se peut que と拘束的用法の devoir が共起している例と判断できる。

(28) Bien que vous ne pouvez pas vous inscrire, **il est possible qu’on peut** vous donner des conseils généraux¹⁹.

(29) Au début, **il est possible qu’il doive** recevoir une alimentation spéciale par les

¹⁷ <http://luxemburg-aubervilliers.webcollege.fr/category/vie-etablissement/unss/>

¹⁸ <https://laurentienne.ca/programme/sciences-infirmieres>

¹⁹ Organisatie voor Clandestiene Arbeidsmigranten vzw, DÉFEND LES TRAVAILLEURS SANS PAPIERS, Une régularisation, Version du 29 septembre 2009

veines.²⁰

(28)と(29)は認識モダリティ表現 **il est possible** と **pouvoir, devoir** の共起例である。(28)はカウンセリングを行っている団体のウェブサイトからの取得例で、「登録しなくても、一般的な助言を与えることができるでしょう」という文意に解することができ、**pouvoir** は拘束的用法と言える。(29)は子育てに関する情報を提供するウェブサイトからの取得例で、**que** 以下の **il** は **bébé** のことである。「最初は、血管から特別な栄養を摂取しなくれはならないかもしれない」という文意から、**devoir** は拘束的用法と判断できる。

(30) **Il est probable que nous devons** travailler uniquement avec des rendez vous,[...] ²¹.

(31) Plus on en fera maintenant pour protéger vos articulations, plus **il est probable que nous pouvons** arrêter ou ralentir l'endommagement articulaire supplémentaire²².

(30)と(31)は、認識的モダリティ表現 **il est probable que** と **devoir, pouvoir** が共起している例である。(30)はパリの美容室のウェブサイトに掲載された文で、新型コロナウイルス禍に対して政府がとった営業自粛措置に対する店舗側の対応について記している。「予約のお客様のみで営業しなくてはならないでしょう」という文意から、**devoir** は「～しなければならない」という意味の拘束的用法である。(31)はマッサージ治療クリニックのウェブサイトからの取得例で、「これ以上の間接の損傷を抑えるかその進行を遅らせることができるでしょう」という文意から、この **pouvoir** は拘束的用法であると言える。

(32) Nous **devons probablement** changer d'état d'esprit, et nous concentrer sur nos concurrents²³.

(33) Même si la personne à qui vous parlez ne peut pas résoudre votre problème, elle **peut probablement** vous donner des informations utiles²⁴.

(32)と(33)は認識的モダリティ表現 **probablement** とモダリティ動詞の共起例である。(32)はウェブサイトのインターネット新聞から取得した、かつてF1のフェラーリの監督を務めていたMaurizio Arrivabeneの言葉である。「われわれはおそらく精神状態を変えて、自分達の競争に集中しなくてはならないだろう」という文意から、**devoir** は拘束的用法と判断できる。(33)は、とあるカナダのオンブズマン事務所の **Conseils pour régler des problèmes par vous-même** と銘打たれたウェブサイトでの取得例で、「その人が有益な情報をきつとあなたに与えられるでしょう」という文意から、**pouvoir** は拘束的用法であると言える。

²⁰ <https://www.inspq.qc.ca/mieux-vivre/alimentation/nourrir-notre-bebe/nourrir-un-bebe-premature>

²¹ <https://www.franckprovost.com.au/salon-1125/hairdresser/45-boulevard-pasteur-75015-paris>

²² <https://drdupied.com/ortheses/guide-des-meilleures-ortheses/les-meilleures-ortheses-du-medio-pied/>

²³ <https://flonly.fr/selon-arrivabene-la-formule-1-doit-etre-plus-interessante-que-la-playstation/>

²⁴ <https://nwtombud.ca/fr/conseils-pour-regler-des-problemes-par-vous-meme/>

以上のような観察と考察から、認識的モダリティ表現と共起するモダリティ動詞は、拘束的用法であることが実証された。Double modals の第一位置に生起する *devoir* 乃至は *pouvoir* が認識的用法である場合、上記の認識的モダリティマーカ―と同じ機能をこれらの動詞が果たす。よって、第一位置に生起するこれらの動詞が認識的用法であるならば、前述の通り認識的モダリティマーカ―に先立たれた位置である第二位置に生起するモダリティ動詞が認識的用法で用いられることは不可能なので、第二位置のモダリティ動詞は必然的に拘束的用法となる。以上のことから、＜仮説4＞の C, D は証明される。

3. 2. Surmodalisation

ここで注意しておかねばならない一つの言語現象は、過剰なモダリティ付与 (surmodalisation) である。この現象について詳細な研究を行った Le Querler(1996)は、
« Les marqueurs de la modalité épistémique sont donc très variés, et ils peuvent se combiner; on assiste quelquefois à une surmodalisation massive, avec plusieurs marqueurs de l'incertitude du locuteur : adverbe modal épistémique, *pouvoir* ou *devoir*, tiroir en *-rais*, psopositions en incise. » と述べ、認識的モダリティ副詞, *pouvoir*, *devoir*, 条件法等の複数の認識的モダリティマーカ―の共起可能性を示している²⁵。

(34) Cela **pourrait peut-être** l'indiquer. Ou **peut-être pas**.(H.M.,2,p.297) 「指し示すかもしれないし、しめさないかもしれない」

(35) Cette photo **devait probablement** figurer dans un album officiel.(H.M.,2,p.88) 「それは公のアルバムに載せるために撮られた写真のように見えた」

(34)では、認識的モダリティが表す「発話内容の真実性に対する話者の確信の程度」が低いという共通点をもつモダリティ動詞 *pouvoir* とモダリティ副詞 *peut-être* が、(35)ではそれがあある程度まで高いという共通点をもつモダリティ動詞 *devoir* とモダリティ副詞 *probablement* が共起している。このように、ある意味で冗長的に二つのモダリティマーカ―が繰り返される場合がある。よって、上記の *il se peut*, *peut-être*, *il est possible* と *pouvoir* が共起した場合、*il se peut* は「~かも知れない」という可能性を表し、*pouvoir* も「かも知れない」という可能性を表し、両者の認識的モダリティが表す「発話内容の真実性に対する話者の確信の程度」はほぼ同じと言える。また *il est certain*, *certainement* と *devoir* が共起した場合にも同様のことが言える。このように、同程度の確信の程度を表す認識的モダリティ表現が冗長的に用いられていると考えられるのである。この現象は、2つの認識的モダリティ表現の表す、話者の確信の程度が同レベルである場合にのみ許される現象である。このような場合は過剰なモダリティ付与がなされていると考えるべきであり、認識的モダリティ表現とモダリティ動詞の拘束的用法が共起している例と混同されてはならないのである。

²⁵ LE QUERLER(1996) : 79.

3. 3. 拘束的用法 + 拘束的用法

続いて＜仮説3＞の H を実証するために、＜仮説5＞を設定する。

＜仮説5＞拘束的用法の *devoir* の後に *pouvoir* がくるとき、その *pouvoir* は拘束的用法である。

この仮説は E の組合せパターンが出現しないということから証明可能である。これまでに見た *devoir* と *pouvoir* の組合せは全て、H: *devoir*＜拘束的用法＞ + *pouvoir*＜拘束的用法＞であり、E: *devoir*＜拘束的用法＞ + *pouvoir*＜認識的用法＞は1例も出来なかった。よって、*pouvoir* が認識的用法でないならば拘束的用法でしかないということになる。加えて F: *pouvoir*＜拘束的用法＞ + *devoir*＜認識的用法＞の例も見いだせなかったということに鑑みると、第一位置＜拘束的用法＞ + 第二位置＜認識的用法＞という組合せ自体が不可であることが考えられる。＜仮説5＞は証明されたと考えられる。

4. 考察

これまでの仮説設定およびその証明により、フランス語の *double modals* で確認されたモダリティの組合せは以下の通りとなる。

- (36) α .(=C) *pouvoir* <認識的用法> + *devoir* <拘束的用法>
 β .(=D) *devoir* <認識的用法> + *pouvoir* <拘束的用法>
 γ .(=H) *devoir* <拘束的用法> + *pouvoir* <拘束的用法>

この3つのパターンから言えることは、*devoir* と *pouvoir* が第一位置において認識的用法である場合には、第二位置に現れる *pouvoir* と *devoir* は拘束的用法になる。逆に、第一位置に現れる *devoir* が拘束的用法で用いられた場合、同じ拘束的用法の *pouvoir* を従えることはあるが、その逆はないということである。この言語事実について考えてみる。

4. 1. モダリティのスコープ

我々はここまで、モダリティを認識的モダリティ(modalité épistémique)と拘束的モダリティ(modalité déontique)に大別してきたが、この考え方は、Pietrandrea(2005)が「The lumping of epistemic and deontic modality under the common label of « modality » is rarely questioned.」²⁶と述べているように、極めて順当な立場であると言える。しかしながら、*double modals* について考える際、この拘束的モダリティの方が問題になる場合があるようだ。Pietrandrea は続けて、「[...] , while epistemic modality should be considered as undoubtably modal [...], the modal status of so-called « deontic modality » is much more

²⁶ PIETRANDREA(2005) : 10

in doubt. »²⁷と述べている。これに関して、double modals について考察した研究をいくつか概観することとする。

Double modalsについて考える際に参考になるのが、van der Auwera & Plungian (1998)におけるモダリティの類型である。彼らはモダリティを、「可能性と必然性をパラダイムの変異体として含む、すなわち可能性と必然性という二つの可能な選択肢をもつパラダイムを構成する意味領域」と定義する²⁸。そしてモダリティを参与者内的モダリティ(participant-internal modality)、参与者外的モダリティ(participant-external modality)、拘束的モダリティ(deontic modality)、認識的モダリティ(epistemic modality)の4つに分類する。参与者内的モダリティは、ある事態に関わる参与者の内的可能性や必然性について言及するものであり、参与者の能力や参与者の内的必要を表す²⁹。それに対して参与者外的モダリティは、ある事態に関わる参与者の外部にあり、その状態の実現を可能に、あるいは必然にする状況に言及するもので、可能性や必然性を表す³⁰。拘束的モダリティは、前述の参与者外的モダリティの下位に属するものであり、参与者に、あることを可能にしたり、強制したりする外部にいる人(しばしば話者である)、そして、あるいは参与者がある事態に関わることを許可したり、それを義務にしたりする社会的、倫理規範について言及するものである³¹。これらが非認識的モダリティ(non-epistemic modality)である。これに対して認識的モダリティは話者の判断を表すものであり、不確実性と妥当性を表す³²。これらをまとめたものが次の(37)である³³。

(37)

Possibility			
Non-epistemic possibility			Epistemic possibility (Uncertainty)
Participant- internal possibility (Dynamic possibility, Ability, Capacity)	Participant-external possibility		
	(Non-deontic possibility)	Deontic possibility (Permission)	
Participant-internal necessity (Need)	(Non-deontic necessity)	Deontic necessity (Obligation)	Epistemic necessity (Probability)
	Participant-external possibility		
Necessity			

²⁷ Ibid.: 10.

²⁸ VAN DER AUWERA & PLUNGIAN(1998): 80.

²⁹ Ibid.: 80.

³⁰ Ibid.: 80.

³¹ Ibid.: 81.

³² Ibid.: 81.

³³ Ibid.: 82.

この枠組みに修正を加えてさらにモダリティの作用域の問題に取り組んだのが Nauze(2008)である。Nauze(2008)は、上記の van der Auwera & Plungian(1998)のモダリティ類型を修正し、(38)のような枠組みを提示した³⁴。

(38)

Participant-internal	Participant-external		Epistemic
	Deontic	Goal-oriented	
Ability	Permission	Possibility	Possibility
Needs	Obligation	Necessity	Necessity

そして、この枠組みを用い、ランダ語、トルコ語、フォン語、ツバル語、リルエット語、コリア語という多様な言語の研究を行った結果、2つ以上のモダリティが文法的文中に生じた場合、その意味的スコープは「認識的モダリティ> 参与者外モダリティ> 参与者内モダリティ」であると主張する(If two modal items from different types are combined within the same clause in a grammatical sentence, their relative semantic scope will fall within the following pattern: Epistemic > Participant-external > Participant-internal)³⁵。拘束的モダリティのある種の階層性を考えるという点で興味深いこの Nauze の枠組みを用い、以下、我々の得た言語事象について考えてみることにする。

4. 2. < 認識的用法 > + < 拘束的用法 >

まずは(36)で提示した α と β のパターンについて検討する。Nauze の主張に従うと、2つのモダリティが現れる時、認識的用法が先行し、次に拘束的用法が続くことになり、その現象を2つのモダリティの異なったスコープで説明できると主張する。これは英語における double modals に関する数多くの研究結果にも合致している。例えば‘might could’を対象に研究した Lebedeva & Orlova(2019)は、*«The double modal might could consists of two modal components arrayed in a tier. Might is used in the meaning of epistemic possibility (supposition implying uncertainty), the other component - the modal verb could - is either dynamic or deontic »*と述べ、この組み合わせでは第一位置に生起する might が認識的モダリティを表し、第二位置に生起する could は拘束的／動的モダリティを表すと結論付けている。同様に i Moré(2016)も *« Firstly, will can, would could and might could are the only combinations found during this research on the possible DM combinations in the North of England. These combinations confirm the previous hypotheses provided in the*

³⁴ NAUZE(2008): 18.

³⁵ Ibid.: 223.

literature review that DM follow the pattern EPISTEMIC + DEONTIC, and so the second modal in Northern English combinations must be *can* or *could*. »と述べる³⁶。Peters & Bembridge(2016)などの主張ともこれは一致する。

さて、Le Querler(1996)は、*devoir* と *pouvoir* の拘束的用法と認識的用法について、内的叙述(*intra-prédicatif*)と外的叙述(*extra-prédicatif*)という用語を用いる。外的叙述とは、われわれが認識的モダリティと呼ぶものの説明に用いられている概念で、その中で *peut-être* の例をあげ、認識的モダリティは意味的には常に外的叙述である([...] *sémantiquement, il est toujours extra-prdicatif: la modalité épistémique porte, de l'extérieur, sur l'ensemble du contenu propositionnel.*)と述べる³⁷。それに対し、伝統的に根源的モダリティと呼ばれるものを内的叙述として区別(*Les effets de sens classiquement appelés radicaux (permission, capaicité, possibilité matérielle) sont intra-prdicatifs: [...]*)³⁸しているので、こちらの方はわれわれの言う拘束的モダリティに相当すると言える。

3.1.で見たように *il se peut que*, *peut-être(que)*, *il est probable que*, *probablement (que)* は認識的モダリティ表現であるので、外的叙述にあたる。よってその作用域は *que* によって、或いは *que* なしで次に生起する文が表す命題全体ということになる。Le Querler の図式に認識モダリティ表現を当てはめると、次のように考えられる。

(39) [MODALITÉ ÉPISTÉMIQUE]

il se peut que
peut-être (que) P
il est possible (que)
 [POSSIBILITÉ] → [SUJET – VERBE]

il est probable P
probablement (que)
 [PROBABILITÉ] → [SUJET – VERBE]

(39)のように認識的モダリティ表現の作用域は P 全体、即ち命題全体である。(36) α と β では第一位置に生起する *devoir* と *pouvoir* が認識的用法であるので、(40)が得られる。

(40) *devoir / pouvoir* [MODALITÉ ÉPISTÉMIQUE] → [SUJET-VERBE]

そして、この[SUJET – VERBE] で表されている部分に拘束的用法の *pouvoir* と *devoir* が生起するので、(40)は(41)に書き換えられる。

³⁶ I MORE(2016): 18.

³⁷ LE QUERLER(1996) : 125.

³⁸ Ibid. : 126.

(41) *devoir / pouvoir*

[MODALITÉ ÉPISTÉMIQUE] → [SUJET-VERBE]

devoir/pouvoir

[MODALITÉ DÉONTIQUE]

このように *double modals* が認識的用法＋拘束的用法で用いられるのは、Le Querler の枠組みを援用して、第一位置のモダリティ動詞の表す認識的モダリティの方がその作用域が広いからであると説明できる。したがって、その用語法は異なるが、Nauze の提唱する枠組みでこの現象は説明可能であると言える。

4. 2. <拘束的用法>＋<拘束的用法>

次に *double modals* の両方の要素である *pouvoir* と *devoir* が拘束的用法で用いられている稀有なケースと思われる(36) γ について検証する。(36) α と β に関しては、認識的モダリティと拘束的モダリティという異なったモダリティの組合せについて、Le Querler の枠組みを用い、二つのモダリティのスコープの違いで説明可能であることを見た。これはすなわち、認識的モダリティのスコープの方が非認識的モダリティのスコープよりも広いという主張をする Nauze の枠組みでも説明可能であることになる。さて、(36) γ の場合は、二つのモダリティ動詞が同じ拘束的用法で用いられている点で興味深いだけでなく、*devoir*>*pouvoir* の語順のみが許容され、*pouvoir*>*devoir* の例は出来しなかった点も注目に値する。この言語事象が Nauze の枠組みで説明可能かを検証する。

4. 2. 1. 実例分析

Nauze の枠組みを当てはめる前に確認しておかなければならない点がある。我々は伝統的用語法に従い、モダリティを認識的モダリティと拘束的モダリティに大別しているが、Nauze は認識的モダリティと非認識的モダリティに大別し、その下位分類として拘束的モダリティを認めている。これについてはただ単に用語法の問題と言いきれない部分があるが、以下実例分析をするにあたり、非認識的モダリティという用語を採用する。これは本稿の論理構成には大きな影響を及ぼさない。何故ならば、本稿ではこれまで、認識的モダリティに含まれないものは全て拘束的モダリティと呼んでおり、われわれの呼ぶ拘束的モダリティは Nauze の呼ぶ非認識的モダリティと同値とみなしてよいと判断するからである。よって、これ以降、実例を分析する場合には、モダリティ動詞の用法を認識的用法と非認識的用法という意味に大別し、非認識的用法の下位分類として Nauze 的立場を採用する。そして、この下位分類を当てはめて非認識的用法のモダリティ動詞がどのような意味を表しているか検討し、参与者外モダリティの方が参与者内モダリティのスコープより広いというその主張にフランス語の言語事象があてはまるかどうかを検証する。

(42) Pilote de ligne, je **dois pouvoir** gérer toutes les situations³⁹.

(43) Liberté d'opinion et d'information. Tu as le droit d'avoir tes propres opinions et de les exprimer. Tu **dois pouvoir** les partager avec les autres, y compris avec des personnes d'autres pays, par tous les moyens possibles⁴⁰.

(44) 3. vous **devez pouvoir** EXERCER vos droits; 4. le cas échéant, vous **devez pouvoir** FAIRE RESPECTER vos droits;⁴¹

(42)は旅客機のパイロットに対するインタビュー記事からの引用例である。文意より、パイロットとしては、どんな状況にも対処『する能力をもっている』、『義務がある』と考えられ、パイロットには旅客の命を預かる者としての外的要因から義務が課せられるので、*devoir* は参与者外モダリティの中の拘束的モダリティである「義務」を表す。一方 *pouvoir* は能力的な面に言及していると考えられよう。よって、*devoir+pouvoir* は、＜参与者外モダリティ＞＋＜参与者内モダリティ＞の組合せである。(43)は、子供向けに人権教育を行うための書物からの引用である。「君は自分自身の意見を持ってそれを表現する自由を持っている」という文脈に続き、「その意見を可能なあらゆる手段で、他国の人間も含めて他者と分かち合うことが出来なければならない」という文意である。この場合、権利と義務という二項対立的概念から考えて、*devoir* は参与者外モダリティの中の拘束的モダリティで「義務」を表し、*pouvoir* は参与者内モダリティの「能力」と考えられる。したがって、この場合も＜参与者外モダリティ＞＋＜参与者内モダリティ＞の組合せになっている。(44)は、あるユニセフの討論後にまとめられたもので、ヨーロッパの子供達に対し、「権利を行使できる義務を持つし、他者の権利を尊重できるようにしなければならない」という文意より、これも＜参与者外モダリティ＞＋＜参与者内モダリティ＞の組合せになっている。これらの例はいずれも、Nauzeの主張する内容と合致する例である。では、次の例を考えてみよう。

(45) Lorsque vous devenez voyageur perpétuel, vous avez besoin d'un emploi qui ne soit pas lié à un seul lieu géographique. Vous **devez pouvoir** vous déplacer. Vous **devez pouvoir** travailler à distance. Vous **devez pouvoir** contrôler votre temps.(Goldberg Sarah, Comment Voyager à Temps Plein, Travailler à Temps Partiel et Vivre Une Vie d'Aventure, 2018, Chapitre 3)⁴²

(46) Je **dois pouvoir** apprendre pour devenir grand⁴³.

(45) は常に旅行をしながら仕事をする人間に向けての書物の中からの引用である。3箇所が生起している *double modals* であるが、当該部分は各々、「あなたは移動できる必要

³⁹ <https://www.nouvelobs.com/societe/20171012.OBS5930/phlebites-ivresse-avarie-pilote-de-ligne-je-dois-pouvoir-gerer-toutes-les-situations.html>

⁴⁰ «Repère junior :manuel pour la pratique de l'éducation aux droits de l'homme avec les enfants » ,p.295.

⁴¹ «Les droits des enfants et les politiques de l'enfance en Europe: de nouvelles approches? », Conférence de clôture du projet « Politiques de l'enfance »,p.50, Leipzig 30 mais – 1^{er} juin 1996.

⁴² この電子書籍にはページ数が付与されていなかったため、章数のみを記した。

⁴³ https://www.travail-emploi.gouv.fr/Affiche_Droits_de_l'Enfant.

がある。離れて仕事ができる必要がある。自分の時間をコントロールできる必要がある。」という意味に解釈できる。**devoir** は、必要に迫られて **pouvoir** 以下で説明されている行為を行わねばならない必要をもつと考えられるので、参与者内モダリティの「必要」を表し、**pouvoir** は能力的なことを表すので参与者内モダリティを表すと言える。したがって、2つの参与者内モダリティの組合せと考えられ、Nauze の主張と齟齬をきたす例であると考えられる。(46)は子供達の権利について書かれたパンフレットから引用した例である。子供達が自らの権利を主張する様々なセリフを語っている中の一つがこれになるが、他の様々な発言との関連を考えると、「私は成長するために学ぶことができる必要がある。」という意味に解釈でき、この **devoir** は参与者内モダリティの「必要」を表すと考えられ、**pouvoir** の方は、子供達はそのような能力を持つ必要があると言えるので、参与者内モダリティを表す。よって、参与者内モダリティと参与者内モダリティの組合せとなる。したがって、これも Nauze の理論に対する反例となる。

これらに加えて、以下の例は、**devoir** が参与者内モダリティを表すか参与者外モダリティを表すか微妙と思われる例である。

(47) Lorsque je travaillais au CNRS, je pouvais espérer y rester jusqu'à la retraite. Maintenant, je **dois pouvoir** me supporter uniquement par ma plume. Cela veut dire que je dois faire autre chose que mes propres livres dans mon coin.(PEREC Georges, *Entretiens et conférences I*, 2003, p.251)

(48) Dans le cadre de cette coopération sélective, l'Europe **doit pouvoir** obtenir les matières premières nécessaires à ses activités, offrir à ses partenaires de justes revenus, équilibrer les transferts de technologies auxquels elle doit procéder par des garanties d'égalité de concurrence pour ses industries.(VEIL Simone, *Une vie*, 2007, p.377)

(47)の例の前半は、「自分が CNRS で働いていた時には、定年までずっとそこに居続ることが期待できたが、現在では文筆業で耐え忍ぶことができないかもしれない」といった意味に解釈できるので、ここで使われている **pouvoir** も **devoir** も非認識的モダリティを表していることは間違いない。**Pouvoir** は参与者内的モダリティの能力にあたると考えられるが、**devoir** の方は、参与者外的モダリティの拘束的モダリティの義務を表しているのか、或いは参与者内的モダリティの必要を表しているのか、おそらくは後者であろう推測できるが決め手がなく、その区別は判然としないように思われる。また(48)では **devoir+pouvoir** の **devoir** が非認識的用法であることは、次に生起する **devoir** が非認識的用法であると判断できることから間違いないと言えるが、参与者外モダリティの義務でも、参与者内モダリティの必要でも解釈できそうである。以上の例は、**devoir** が非認識的用法であることは間違いないが、それが参与者外的モダリティの「義務」を表すか、参与者内的モダリティの「必要」を表すか判別が難しいケースであり、いずれの解釈も成立しそうであるというのが実際のところである。

これらの例から考えると、必ずしも参与者外モダリティ>参与者内モダリティというスコープに当てはまらず、参与者内モダリティ(**devoir**)>参与者内モダリティ(**pouvoir**)と考えら

える例も出てくることから、この(36) γ を説明する枠組みとして Nauze の枠組みは不十分であると言える。

5. 結論

本研究で得られた **double modals** の組合せのパターンは以下の通りである。

- (49) α . **pouvoir** <認識的用法> + **devoir** <拘束的用法>
 β . **devoir** <認識的用法> + **pouvoir** <拘束的用法>
 γ . **devoir** <拘束的用法> + **pouvoir** <拘束的用法>

本研究では、**devoir** と **pouvoir** は英語の法助動詞と異なり後ろに不定詞を従えるという動詞と考えられることから、統辞的には互いが互いを従えて **double modals** を作ることができるが、その際の **devoir** と **pouvoir** が表すモダリティに意味的組合せには制限があることが明らかにした。すなわち、**pouvoir** が先行し述語動詞として働いた場合には認識的用法となり、後続する **devoir** は拘束的用法となる((36) α)。逆に **devoir** が述語動詞として働いた場合には2通りのパターンが出来する。**devoir** が認識的用法となった場合には **pouvoir** は拘束的用法となり((36) β)、**devoir** が拘束的用法となった場合には **pouvoir** も拘束的用法となる((36) γ) というものである。このうち α と β に関しては、認識的モダリティの方が拘束的モダリティよりもその意味的スコープが広いと主張する Le Querler や Nauze などの枠組みで説明可能であることが確認でき、この点に関しては追試検証に十分に成功したと言える。それに対し γ の場合には、Nauze の提唱する主張の反例が出来し、その枠組みでは十分説明できないことも明らかになった。今後は **devoir** と **pouvoir** が両方とも拘束的用法で用いられる場合に、なぜ常に **devoir** が先行するのか、そしてその現象がどのように説明可能かを、モダリティ概念という枠組みの再考を視野に入れつつ明らかにすることを目指すことになる。

参考文献

(和文)

- 甲斐基文(1990).「Peut-être の疑問文の生起について」、『ふらんぼー』, 17, 89-100.
甲斐基文(2001).「認識的モダリティを表す副詞: 仏日対照言語学の視点から(その1)」、『甲南女子大学研究紀要』, 37, 17-30
甲斐基文(2001).「認識的モダリティを表す副詞: 仏日対照言語学の視点から(その2)」、『ヨーロッパ文学研究』, 24, 19-31
甲斐基文(2004).「Charles BALLY のモダリティ理論(その1)」、『甲南女子大学研究紀要. 文学・文化編』, 40, 79-83
甲斐基文(2010).「Charles BALLY のモダリティ理論(その2)」、『東京薬科大学研究紀要』, 13, 17-21.
川口順二(編).(2015).『フランス語学の最前線 3【特集】モダリティ』, 東京, ひつじ書房.
川島浩一郎(2012).「助動詞の定義と Pouvoir (言語と想像力)」、『福岡大学研究部論集人文科学編』, 11(4), 39-48.
岸本聖子(2016).「法助動詞 **devoir** と **pouvoir** の陳述に関わる意味効果—語用論的観点からの分

析一」,『フランス語学研究』, 49, 43-64.

黒滝真理子(2005).『DeonticからEpistemicへの普遍性と相対性—モダリティの日英語対照研究』, 東京, くろしお出版.

三ツ石直人(2017).「may の研究」,『東洋大学大学院紀要』, 54, 291-305.

守屋哲治(2008).「法助動詞の発達の普遍性と個別性:英語・日本語・韓国語の対照に基づいて」,『金沢大学教育学部紀要(人文科学・社会科学編)』, 57, 1-12.

守屋哲治,堀江薫(2004).「日英語のモダリティ体系にみられる意味変化の方向性の違い」,『言語処理学会第 10 回年次大会論文集』, 185-188.

(欧文)

BALLY, Charles.(1942). «Syntaxe de la modalité explicite», *Cahiers Ferdinand de Saussure* 2,3-13.

BALLY, Charles.(1965). *Linguistique générale et linguistique française*, Quatrième édition revue et corrigé, A. Francke AG Verlag, Berne.

BARBET, Cécile.(2012). «Devoir et pouvoir, des marqueurs modaux ou évidentiels?», *Langue Française*, 173, 49-63.

BATTISTELLA, L. Edwin.(1995). «The Syntax of the Double Modal Construction», *Linguistica Atlantica*, 17, 19-44.

BOUR, Anthony R.(2018). «Multiple Modality System in Southern Scotland: Levels of Acceptability of Double and Triple Modals in the 21st century Scottish Borders region», *New Philologies*, 3(2),1-26.

BUTTERS, Ronald.(1973). «Acceptability judgments for double modals in Southern dialects. New Ways of Analyzing Variation in Linguistics», ed. by Charles-James N. Bailey and Roger Shuy, 276-286. Washington, D. C.: Georgetown University Press.

BYBEE, Joan, PERKINS, Revere & PAGLIUCA,William. (1994). *The Evolution of Grammar*, The University of Chicago Press.

CARON, Jean & CARON-PARGUE, Josiane.(2002). «A multidimensional analysis of French modal verbs *pouvoir*, *devoir* and *falloir*», F.H.Van Eemeren & al. (Eds), *Proceedings of the 5th International Conference on Argumentation*, University of Amsterdam, 25-28.

di PAOLO, Marianna, Charles McClenon, & Kenneth Ranson.(1979). «A survey of double modals in Texas». *Texas Linguistic Forum*, 13.40-49.

di PAOLO, Marianna.(1989). «Double Modals as Single Lexical Items», *American Speech: A Quarterly of Linguistic Usage*. 64.3: 195-224. Web. 29 Mar. 2015.

DURRER, Sylvie. (1998). *Introduction à la linguistique de Charles Bally*, Lausanne, Delachaux et Niestlé.

HASTY, J. Daniel. (2012). «We might should oughta take a second look at this: A syntactic re-analysis of double modals in Southern United States English», *Lingua*, 122, 14, 1716-1738.

HORVAT, Ana Werkmann.(2018). «Semantic restrictions on modal auxiliary combinations: Evidence from Croatian double modal constructions», *Jezikoslovlje*, 19(3), 509-532.

i MORÉ, Anna Novich.(2016). *Double Modals in the British Isles: Scotland and Northern England*, Treball de Fi de Grau, Universitat Autònoma de Barcelona.

KAI, Motofumi. (2000). *Etude contrastive des marqueurs de modalité épistémique en français et en*

- japonais*, Mémoire de DEA, Université de la Sorbonne Nouvelle-Paris III.
- LEBEDEVA, Irina.S. & ORLOVA Svetlana .N.(2019), «Semantics and pragmatics of the double modal ‘might could’», *Training, Language and Culture*, 3(2),71-84.
- LE QUERLER, Nicole.(1996). *Typologie des modalités*. Caen, Presses Universitaires de Caen.
- LE QUERLER, Nicole.(2004). «Les modalités en français», *Revue belge de Philologie et d'Histoire*, 82-3, 643-656.
- NAUZE, Fabrice Dominique. (2008). *Modality in Typological Perspective*, PhD diss., Amsterdam University.
- NAGLE, Stephen J.(1991). *The English double modals and phrase structure*. Paper presented at the XLIV Southeastern Conference on Linguistics Meeting, Knoxville, Tennessee.
- PALMER, Frank Robert.(1982). *Semantics*, 2nd edition, Cambridge, Cambridge University Press.
- PAMPEL, John R.(1975). «More on Double Modals», *Texas Linguistic Forum*, 2, 110-121.
- PETERS, Andrew & BEMBRIDGE, Gavin.(2016). «Structural problems or multiple modal constructions : Views from Madarin rural Chesapeake English and Jamaican Creole», *Proceedings of the 2016 annual conference of the Canadian Linguistic Association*.
- PIETRANDREA, Paola.(2005). *Epistemic modality - Functional properties and the Italian system*. [=Studies in Language Companion Series 74]. Amsterdam-Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- SUEUR, Jean-Pierre.(1977). «A propos des restrictions de sélection : les infinitifs *devoir* et *pouvoir*», Paris : *Linguisticae investigationes*, I,2, 375-409.
- SUEUR, Jean-Pierre.(1979). «Une analyse smantique des verbes *devoir* et *pouvoir* », *Le Français Moderne*, 47, 2, 97-102.
- SUEUR, Jean-Pierre.(1983). «Les verbes modaux sont-ils ambigus ? », *La notion sémantico-logique de modalité*, DAVID, J. et KLEIBER,G.(éds.), Paris : Klincksieck, 165-182.
- THRAINSSON, Höskuldur & VIKNER, Sten. (1995). «Modals and double modals in the Scandinavian Languages», *Working Papers in Scandinavian Syntax*, 55, 51-88, Lund University.
- van der AUWERA, Johan & PLUNGIAN, Vladimir. (1998) . «Modality’s semantic map», *Linguistic Typology*, 2, 79-124.
- VETTER, Barbara.(2015). *Potentiality: From Dispositions to Modality*, Chicago: Oxford University Press.
- VETTERS, Carl.(2012). « Modalité et évidentialité dans *devoir* et *pouvoir* : typologie et discussions», *Langue Française*, 173,31-47.
- WILLIAMSON, Sara Lynn.(2018). *Might should we consider this?:Patterns of double modal inversion in Southern United States English*, M.A.Thesis, Simon Fraser University.
- ZIEGELER, Debra.(2011). «The Grammaticalisation of Modality», *The Oxford Handbook of Grammaticalization*, HEINE, Bernd & NARROG, Heiko (éds), Chicago: Oxford University Press, 595-604.

資料体

FRANTEXTE

The Internet

村上春樹(2009). 『1Q84 BOOK1』, 東京:新潮社.(MURAKAMI,H.(2011), 1Q84, Livre 1, Belfond).

村上春樹(2009). 『1Q84 BOOK2』, 東京:新潮社.(MURAKAMI,H.(2011), 1Q84, Livre 2, Belfond).
村上春樹(2010). 『1Q84 BOOK3』, 東京:新潮社.(MURAKAMI,H.(2011), 1Q84, Livre 3, Belfond).

